

# A Contrastive Study of Complex Sentences in Japanese and English : Based on Errors by Japanese English Learners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/39074">http://hdl.handle.net/2297/39074</a>

# 日英語複文構造の対照言語学的研究： 英語学習者の誤用の観点から

守屋 哲治

## A Contrastive Study of Complex Sentences in Japanese and English: Based on Errors by Japanese English Learners

Tetsuharu MORIYA

### 1. はじめに

日本語を母語とする学生が英語を学習する際に問題になることの一つに干渉(transfer)がある。干渉とは、第二言語の習得の際に母語の知識が無意識に用いられ、第二言語の習得に影響を及ぼすことを言う。日本語母語話者が韓国語を習得しようとする場合のように、干渉が言語習得を促進する場合もあるが、日本語と英語のように多くの点で違いがある言語間の場合には、干渉はマイナスに働くことがほとんどである。

干渉が顕著に表れやすいのは、音韻・発音、語彙、談話機能を担う表現などであると言われており、統語的なレベルでの干渉はあまり顕在化しないと考えられている。

本論文の目的は日英語の複文構造、とりわけ、節が名詞を修飾する構造を取り上げ、この構造の日英語間の相違がどのような形で日本語母語話者の英語習得に影響を及ぼすかを分析することである。

### 2. 日英語の名詞修飾節

日本語と英語の統語構造の間には、基本語順の違いのように、比較的顕在的な違いが多く見られる。例えば、日本語は「太郎が本を読む」のように主語(S)－目的語(O)－動詞(V)の基本語順を持つのに対し、英語は Taro reads books のように SVO の基本語順を持つ。動詞と目的語は一つの構成素として動詞句になってい

るので、動詞句内の語順だけに注目すると、日本語では主要部の動詞が目的語に後続しており、英語の場合には主要部の動詞が目的語に先行している。このような特徴は動詞句以外の構造でも見られるため、日本語を主要部後置言語(head-final language)、英語を主要部前置言語(head-initial language)と呼ぶことがある。

母語の言語知識が第二言語の習得に影響を与える現象である干渉(transfer)は、音声や語彙、語用論的側面で顕著であり、基本語順のような統語面の違いによる干渉はあまり顕在化しないとされている(Ellis1994:316)。

しかし、一見すると構造の面で語順以外に大きな違いが見られないにも関わらず、詳細なレベルで比較すると違いが見えてくる場合もある。その典型的な例が、節が名詞を修飾する構造である。

節が名詞を修飾する構造は、主要部前置言語である英語では、「名詞＋節」の語順になり、主要部後置言語である日本語では「節＋名詞」の語順になる：

- (1) a. [太郎が買った]本  
b. the book [which Taro bought]

この違いは、日本語が主要部後置言語であるのに対し、英語が主要部前置言語であるという違いを直接反映しているため、英語学習者にとつ

て特に大きな困難を生じることはない。

しかし、表面的な語順の違いだけでなく、被修飾名詞と修飾節の意味的な関係まで考慮に入れると、日本語にも英語にも大きく二種類の修飾関係が存在することがわかっている：

- (2) a. [さんまを焼く]男  
b. [さんまを焼く]匂い

(2a)では、被修飾名詞を修飾節の中に入れて、「男がさんまを焼く」という表現が可能になるのに対して、(2b)では被修飾名詞「匂い」を修飾節の中に入れることはできない。つまり、「匂いがさんまを焼く」とも言えないし、「匂いでさんまを焼く」という言い方もできない。寺村(1975)は、(2a)のように被修飾名詞が修飾節の中で何らかの格を持つ関係を「内の関係」と呼び、(2b)のように被修飾名詞が、修飾節の中で格関係を担うことのない関係を「外の関係」と呼んで区別している。

この「内の関係」、「外の関係」の区別は英語の「関係節」と「同格節」の区別にほぼ相当する：

- (3) a. the news that John told me  
b. the news that John passed the exam  
(4) a. John told me the news.  
b.\*John passed the exam the news.  
(5) a. John told the news to me.  
b.\*John passed the news to me.

(3a)の the news は(4a)や(5a)のように修飾する節の中に繰り入れて独立した文を作ることが可能なことから、(3a)の修飾節と被修飾名詞の間には日本語における「内の関係」が成立していることがわかる。英文法ではこのような関係を持つ修飾節を「関係詞節(relative clause)」と呼んでいる。一方、(3b)の the news は(3a)とは異なり、(4b)や(5b)が非文であることからわかる通り、被修飾名詞を修飾節の中に繰り入れて独立した

文を作ることはできない。英文法ではこのような関係を持つ修飾節を「同格節(appositive clause)」と呼んでいる。

このように、「内の関係」を持つ修飾節と関係節、および「外の関係」を持つ修飾節と同格節は統語的な関係からすると重なる部分が多いことがわかる。寺村(1975)は、「内の関係」と「外の関係」における被修飾名詞と修飾節の間に見られる意味関係の違いを「付加的」修飾と「内容補充的修飾」修飾の違いと捉えている。例えば、「晩年の検校が記憶の中に存していた彼女の姿」(内の関係)では、検校の記憶していた(春琴の)「姿」がどんな姿であったかは分からないのに対し、「宮女たちが群がって水を掬み、布を洗っていた姿」(外の関係)では作者が想像している「姿」がどんな姿かを知ることができる。寺村(1975)は、前者のような修飾を「付加的」と呼び、後者のような修飾を「内容補充的」と呼んでいるわけである。

Huddleston and Pullum (2002:1039)では、関係詞節は修飾語(modifier)であるのに対し、同格節は補部(complement)であって被修飾名詞の内容を表すとしているので、関係詞節と同格節の意味的な特徴付け自体は「内の関係」、「外の関係」の意味的特徴付けとほぼ対応していると考えられる。<sup>1</sup>

### 3. 「内の関係」と関係詞構文

寺村(1977a)は、「内の関係」が成立するためには、被修飾名詞は実質名詞でありさえすればよいと述べている。これは、「はず」のような形式名詞の多くが「内の関係」を成り立たせないことを言おうとしたものである。その上で、寺村(1977a)では、被修飾名詞が、修飾節の中でどのような格関係を持ち得るかを、実例を元に詳細に分析している。一番問題がないのが「本を買った太郎」のように「が」格の役割を持つ場合と、「太郎が買った本」のように「を」格の役割を持つ場合である。また、「に」格もその担う意味の多様性にもかかわらず被修飾名詞にな

ることは問題ないとしている。

しかし、「から」格や「と」格になると意味的な制約がかかってきて、(6a)における「から」格の意味は(6b)では読み取れず、「彼がその町に引っ越してきた」の読みになるのに対し、「出刃包丁から血がしたたる」の格関係が、「血がしたたる出刃包丁」でも読み取れる。

- (6) a. 彼がその町から引っ越してきた  
 b. 彼が引っ越して来た町
- (7) a. 出刃包丁から血がしたたる。  
 b. 血がしたたる出刃包丁

「と」格の場合は、(8)のような「相棒のト」は問題ないが(9)のような「連れのト」の場合はほとんど不可能であると述べている。「彼女と結婚する」に対応する「結婚する彼女」は問題ないが、「弟と野球をする」に対応する意味で、「野球をする弟」を解釈することは通例できない。

- (8) ~ト見合いする、結婚する、けんかする、衝突する、仲直りする
- (9) ~ト食事する、行く、見る

「相棒のト」格は、動詞に対する補部(complement)になっているのに対し、「連れのト」格は動詞が要求する項ではなく付加詞(adjunct)として機能している。

このような格関係を英語の関係詞節の場合と比較してみると「が」格や「を」格などが被修飾名詞となる場合には関係代名詞節による修飾となるが、場所を表す「で」格や「に」格などは関係副詞節による修飾となる。英語の場合には、修飾節と被修飾名詞との間に関係詞が介在し文法的関係を明示するが、日本語には関係詞にあたるものが存在しないため、修飾節と被修飾名詞との関係は、述部の意味から推定することになる。従って、述部の意味から想定しにくい格関係のものほど被修飾名詞になりにくいのではないかと考えられる。また、「内の関係」

には、英語の関係代名詞節の修飾と、関係副詞節による修飾の両方が含まれるため、日本語を母語とする英語学習者にとっては、関係代名詞節と関係副詞節の区別が日本語の干渉により難しくなることが予測される。

#### 4. 「外の関係」と同格節構文

「外の関係」が持つ意味関係について、寺村(1974,1977b)は、「ふつうの内容補充」と「相対的補充」の二種類に分けた上で、それぞれの意味関係を取り得る名詞の種類について検討している。

「ふつうの内容補充」とは、被修飾名詞が持つ意味内容を、修飾する節が説明するもので、修飾節をX、名詞をNとした場合、XNという構造が「NはXものだ」と言い換えられる特徴を持つ。例えば、(10a)は(10b)のように言い換えることが可能である。

- (10) a. 宮女たちが布を洗っていた姿  
 b. (その) 姿は、宮女たちが布を洗っていたものだ。

英語の同格節構文でもこのような言い換えは可能である。(11a)のような同格節と被修飾名詞の構造は、(11b)のように、名詞を主語とし、同格節がbe動詞の後ろに来る構造に言い換えることができる。したがって、この「ふつうの内容補充」の意味関係は英語の同格節と被修飾名詞の意味関係と同等と考えてよい。

- (11) a. the fact that he had put his idea into writing  
 b. The fact is that he had put his idea into writing.

一方、「相対的補充」とは、修飾する節が名詞の内容を表すのではなく、因果関係や前後関係といった、相対的概念を示す働きをする場合を指している：

- (12) a. 火事が広がった原因  
 b. 深酒をした翌日  
 c. 先頭集団が走っている前

(12a)は因果関係、(12b)は時間的前後関係、(12c)は空間的前後関係を表している。これらを(10)のように「NはXだ」のように変換すると(13)のようになる：

- (13) a. 原因は火事が広がったことだ  
 b. 翌日は深酒をした。  
 c. 前は先頭集団が走っている。

しかし、(12)と(13)では表す状況が異なっていることがわかる。(12a)の「火事が広がった原因」では、「火事が広がった」のは、ある「原因」によって引き起こされた「結果」であるのに対し、(13a)では、「火事が広がった」のが、他の事態を引き起こす「原因」になっている。このような相対的關係の逆転は(12b)と(13b)、(12c)と(13c)の間にも見られる。このことから、「外の関係」でも「ふつうの内容補充」と「相対的補充」ではかなり意味関係が異なることがわかる。

「ふつうの内容補充」の表す意味関係は、英語の同格構文が持つ意味関係と同等であることを見たが、それぞれの言語で実際に用いられる名詞の種類・範囲に違いがあるかどうかを確認しておく。

寺村(1977b)では、「外の関係」において「ふつうの内容補充」の意味関係で被修飾名詞になるものを以下のように分類している：

- (14) a. 発話、思考の名詞とその内容  
 「言葉」「依頼」「期待」「意見」「思い」など  
 b. 「コト」を表す名詞とその内容  
 1. 「事実」「コト」「事件」「話」など  
 2. 「結果」など  
 3. 「運命」「宿命」「身の上」「境遇」など

4. 「習慣」「風習」「癖」など  
 5. 「歴史」「過去」「過程」「記憶」「夢」およびそのたぐいの名詞  
 6. 「可能性」およびその同類  
 7. 「作業」「仕事」「役割」など  
 8. 「方法」「準備」「資格」「目的」その他  
 c. 感覚の名詞とその内容  
 「姿」「気配」「シーン」「顔」「匂い」など

(14)のリストに挙がっている名詞に修飾節をつなげた場合、「という」が介在し得るものとそうでないものがあることがわかる。寺村(1974, 1977b)は、「外の関係」にはXとNの間に「という」が必ず介在しなければならないもの、介在が任意なもの、そして介在が不可能なものがあることを指摘している：

- (15) a. それが正しいという意見  
 b. \*それが正しい意見  
 (16) a. 女房の幽霊があらわれるという話  
 b. 女房の幽霊があらわれる話  
 (17) a. \*さんまを焼くという匂い  
 b. さんまを焼く匂い

寺村(1977b)は、「という」が介在できるか否かは修飾節の内部構造だけから言えることでもなく、修飾される名詞の種類だけから言えることでもなく、両者がいわば相関的に「という」の使用を条件づけているとしている。ただ、(14a)の類はほぼすべてが「という」を介在させると言ってよさそうである。「という」の介在可能性の問題は、修飾節の独立性やモダリティの問題とも関連する興味深いものであるが、詳しい検討は別の機会にゆずることとする。

「外の関係」に立ちうる名詞の種類に対し、同格節構文で被修飾名詞になり得るものにはどのような種類があるだろうか。Huddleston and Pullum (2002:965)は、同格節は修飾する名詞の補部であるという立場から、同格節をとる名詞

の類別を(18)のように示している：

- (18) i. admission, agreement, argument, assertion, assumption, belief, boast, claim, complaint, conclusion, discovery, expectation, feeling, guess, hope, implication, inference, knowledge, objection, promise, proof, proposal, revelation, rumour, saying, statement, suggestion, thought, warning, worry
- ii. awareness, certainty, confidence, eagerness, inevitability, likelihood, possibility, probability, sorrow, willingness
- iii. chance, danger, evidence, fact, faith, idea, impression, message, news, odds, opinion, principle, proposition, prospect, sign, story, tradition, view

(18i)の名詞は動詞派生名詞、(18ii)は形容詞派生名詞、(18iii)は他の品詞からの派生とは考えられないものである。

英語の場合、どのような意味を持つ名詞が同格節構文に用いられ得るかという観点から見ると、admission, assumption, expectation, saying, suggestion, thought など日本語の(14a)の分類に属するものが動詞派生には多く見られ、形容詞派生の名詞では certainty, likelihood, possibility, など(14b-6)の分類に属するものが多く見られる。全体的に見てもこの2つの類に属するものが多いが、(14b-1)に属すると考えられるもの(fact, news, rumour など)、(14c)に属すると考えられるもの (awareness, sign など) も目につく。また、(18)には挙げられていないが、(14b-5)に属する dream も同格節構文に用いることができる：

- (19) When I was five, I had a dream that my friends and I were being ripped apart and eaten by a giant. (BNC F7R)

また、(14b-3,4,5)の類に属する名詞が同格節構文に用いられるケースはそれほど一般的とは言えず、(14b-7,8)に属する名詞は同格節構文に用いることはほぼ不可能である。<sup>2</sup>

このように見てくると、「ふつうの内容補充」に関して言えば、英語の同格節構文に用いられ得る名詞の種類は、日本語の「外の関係」で被修飾の位置に起こりうる名詞の種類よりも狭いということが言える。

また、「相対的補充」の意味関係は、英語では(20)のように同格節構文で表す場合もあるが、(21a)のように相対的概念を表す語を接続詞として用いたり、(21b)のように前置詞句で表す場合などがあり、やはり日本語の「外の関係」に立ちうる名詞のほうが、英語の同格節構文に用いられる名詞よりも範囲が広い。

- (20) a. the result that aesthetic objects became direct objects of attention (BNC A6B)

- b. The reason that sales have not boomed is that many customers have been disappointed at what robots do for them. (BNC ABH)

- (21) a. before he died

- b. because of his death

## 5. 英語学習者の誤用

3節で見た通り、日本語を母語とする英語学習者にとって、日本語には関係詞が明示的に存在しないので、関係代名詞構文と関係副詞構文の区別があいまいになりやすいことが考えられる。その結果、関係代名詞構文と関係副詞構文の混同が起こりやすいことが予測される。また、4節で見た通り、「外の関係」に立ちうる名詞の種類に比べ、同格節構文に用いられる名詞の種類は限られている。これは日本語の「外の関係」のほうが英語の同格節構文より生産的であることを意味している。このため、英語学習者は同

格節構文を過剰一般化して使用し、英語では同格節を本来用いることのできない場合にも用いてしまうということが予測される。

本節では、このような予測を元に、英語学習者コーパスのデータを調べ、誤用・正用の背後にある要因について考察する。

本節で用いるコーパスは日本人英語学習者自由英作文コーパス (Japanese EFL Learner Corpus: JEFLL) で、およそ 10,000 人の中学・高校生の英作文のデータであり、総語数はおよそ 70 万語である。生徒は特定のトピックを与えられ、辞書を用いずに 20 分間でそのトピックについて英文を書くタスクを与えられる。また、英語で言うことのできない単語は日本語を用いてもよいことになっている。生徒が書いた英作文データは添削などを経っていないので、文法・語法上の誤りなどもそのまま反映されている。与えられるトピックは、「浦島太郎」、「ごはんかパンか」、「文化祭」、「地震」、「お年玉」、「怖い夢」の 6 つである。このコーパスはインターネット上で無料公開されている ([http://scn.jkn21.com/~jefll03/jefll\\_top.html](http://scn.jkn21.com/~jefll03/jefll_top.html))。<sup>3</sup>

### 5.1. 関係詞構文

関係詞構文については、関係代名詞構文と関係副詞構文の混同の程度を調査することを目的として、被修飾名詞として場所を表す *place*, *village* と時を表す *time*, *day* を取り上げ、*which*, *when*, *where* で導かれる関係詞を用いている用例を抽出した。関係詞で導かれる修飾節に定形動詞を用いている場合のみを考察の対象とし、*to* 不定詞になっているケースは除外した。

それぞれの組み合わせの生起数、関係詞の用法が適切な文の数、不適切な文の数は表 1 の通りである：

組み合わせ	生起数	適切	不適切
place + where	17	16	1
place + which	9	7	2
village + where	3	0	3
village + which	1	0	1
time + when	16	14	2
time + which	2	0	2
day + when	16	16	0
day+ which	3	2	1

表 1 でまず注目したいのは、*place + where*, *time + when*, *day + when* の相対的使用数の多さと間違いの少なさである。それぞれの組み合わせの例を以下に挙げる（関係詞の使用が不適切な文の前には\*がついている）：

#### (22) *place + where*

a. He came back to **the place where** he lived.  
(浦島太郎、中 3)

b.\*I am always wearing jurge when I'm at home or I go to **the place where** is near to my house.  
(お年玉、高 2)

(22b) では *where* を関係代名詞として用いている。また、この組み合わせで適切なもの 16 例のうち、(22a) のように関係詞節の主動詞が *live* であるものが 6 例見られた。

#### (23) *time + when*

a. I have few **time when** my house is in fire.  
(地震、中 2)

b.\*Second, reason is the **time when** have to leave house is different by each person.  
(朝食、高 2)

(23b) の誤用は、この文だけを見ると *when* が関係代名詞として用いられた解釈と、従属節の主語が脱落しているという解釈の両方が可能だが、

表 1. 関係詞構文の使用状況

前後の文章を見る限り、この生徒が主語を脱落させる例を他に見つけることはできないので、関係代名詞として用いている例と解釈した。

## (24) day + when

- a. The school festival is the only **day when** girls come to this school.

(文化祭、中3)

- b. In addition, to my surprise, the **day when** I had this bad dream was very the day wehn I visited to china.

(怖い夢、高3)

これら3つの組み合わせでは、被修飾名詞が、場所や時の概念を表す名詞として一般性を持ち、スキーマ性が高いため、生徒は日々の英語学習の中で名詞と関係詞のつながりをひとまとまりのチャンクとして記憶にインプットしている可能性が高い。

それに対して、*village*のような、より具体的な場所を表す名詞を節が修飾する場合には、チャンクが用いられるのではなく、統語的な計算が必要となり、そのような計算が必要な場合ほど、日本語の干渉が入り易くなるのではないかと思われる：<sup>4</sup>

## (25) village + where

- a.\*After Urashima became an old man, anyway he went to the **village where** he had loved.

(浦島太郎、高2)

- b.\*Urashima-Taro didn't want to live in the **village where** aren't anybody whom he knew.

(浦島太郎、中3)

## (26) village + which

- \*Because Taro Urashima became a old man, he was very shocked And he was the poorest in the **village which** he lived.

(浦島太郎、中3)

スキーマ性の高い名詞が修飾される時、修飾する関係詞節とのつながりまでが学習者の頭の中にチャンクとして入っているとすれば、*place* + *which*, *time* + *which*, *day* + *which* という組み合わせが相対的に頻度が低く、不適切な文の割合も高くなっているのは、*where* や *when* が続く場合に比べてチャンクとしては定着しておらず、統語的な計算がある程度必要となっているからと考えられる。<sup>5</sup>

## (27) place + which

- a. I like to travel for famous **places which** has a lot of things to learn.

(文化祭、高1)

- b. \*...only few people came because our class is located in the **place which** no one will come in every day life except B oand our classmates.

(文化祭、高2)

## (28) time + which

- a.\*We eat the **time which** I want to eat.

(朝食、中3)

- b.\*When I am very busy and not **time which** I eat breakfast, I eat ochazuke very quickly.

(朝食、高2)

## (29) day + which

- a. I can't wait the **day which** has our school festival.

(文化祭、高1)

- b.\*And Finally we have the **day which** we have to clean our school.

(文化祭、高2)

この3つの組み合わせの中では、*place* + *which* が他の2つよりも相対的に多く使用されている。ただし、この組み合わせを用いているのはすべて高校生である。これは、*place* + *which* の組み合わせの背後にある、場所の概念を表す名詞を動詞の項に位置付ける認知操作が、概念操作一般の発達とリンクしている可能性を示している。



一方、(28)や(29b)のように相対的に低頻度の組み合わせで誤りが見られる場合は、その前後の文章も単文が多く、冠詞が欠落するなど、英語らしさにかける特徴が見受けられる。関係詞の使用の誤りと、これらの特徴は、今までの学生が書いた英語を見てきた経験からすると相関性があるように思えるが、この点はより具体的な調査をする必要がある。

関係詞構文の使用状況の調査・観察から見えてきたことを整理すると、place, time など場所や時間を表す名詞と関係副詞のつながりはチャンクとして学習者の頭の中に入っている可能性が高く、比較的多く使用され、間違いも少ない。その一方でこれらの名詞でも which が後続する場合、あるいは village のようなより具体的な名詞を用いる場合などは頻度が低く、誤りの割合も増えていることから、日本語の干渉が入りやすくなっていると考えられる。

## 5.2. 同格節構文

4節では、日本語で「外の関係」に立ちうる名詞と、英語で同格節構文に用いられる名詞を比較したが、「ふつうの内容補充」に限ってみても、日本語の名詞のほうが英語の名詞よりも範囲が広く、さらに英語では「相対的補充」の同格節構文は用いられないため、日本語を母語とする英語学習者は、同格節構文については過剰一般化による誤用が起こることを予測した。

本節ではまず、この予想に合致する用例を検討する。その上で、正しく用いられている同格節構文についても検討する。特に後者については正の転移 (positive transfer) が起こっている可能性について言及する。

### 5.2.1 同格節構文の過剰生成

今回、データとして用いた学習者コーパスは、6つのトピックが指定されており、生徒たちはそのトピックを展開させることをタスクとして課せられている。例えば、「浦島太郎」では、お爺さんになってしまった浦島太郎がその後どう

なっていたかを、自分で考えて書くというものである。従って、トピック自体が制約条件として働き、意味的に使われやすい単語と、使われにくい単語が出てくることが考えられる。そのため、本節では用例の絶対数の対比などはせず、観察された用例をそれぞれ検討していくこととする。

(30) a. \*After all he wasn't aware of his **change that** he had become an old man.

(浦島太郎、高2)

b. \*He bullied the turtle as if he deleted the **past that** he saved turtle.

(浦島太郎、高3)

c. \*Suddenly I heard a **sound like that** someone was walking to my room.

(怖い夢、高2)

d. \*It is a Japanese **custom that** parents or uncle and so on give some money to children at the beginning of a year.

(お年玉、高3)

e. In Japan, we have a **custom to** give some money to children at new-year- biggining.

(お年玉、高3)

(30)に用いられている名詞は、日本語の場合にはいずれも、「外の関係」に立ちうる種類である。(30c)の例では、日本語の場合、「～のような音」のように、「ような」が修飾節と被修飾名詞の間に入るため、誤って like を入れたものと考えられる。(30a,b,c)は、英語ではどのような形でも「ふつうの内容補充」を表す語句を加えることはできないが、(30d)の custom の場合には、通例 that で導かれる定形節ではなく、通例 of で導かれる前置詞句、あるいは to 不定詞句で「ふつうの内容補充」を行う。JEFLC コーパスの中で custom の後に of を用いた例は無く、to 不定詞を用いたのは(30e)で示した1例のみである。

同格節構文の過剰生成が関わっている別の種類の例として、日本語の形式名詞にあたる名詞

を被修飾名詞に用いてしまうケースもある：

(31) a. \*However, the **thing that** I had done so made himself who was here.

(浦島太郎、高2)

b. \*He was aware of the important **thing that** he have lost his time with the city, the people and the society, and the time never come back to him.

(浦島太郎、高2)

一方、JEFLL コーパスの中には、当然のことながら正しい同格節構文を使用している例も見受けられる：

(32) a. And this is **evidence that** I don't think so deeply for breakfast. (朝食、高2)

b. But he did not abandon his **hope that** he returned to young man who is the shape before he had been to Ryu-Gu-Jo...

(浦島太郎、高2)

c. One day I heard a **news that** unknown creature was in the river.

(怖い夢、高1)

d. He couldn't believe **that fact that** he was an old man. (浦島太郎、高2)

このコーパスの中で一番多かった正しい同格構文は、**dream** を被修飾名詞に用いたケースである。これは、上でも述べたが、JEFLL の課題の中に「怖い夢」という、今まで見た夢でもっとも怖かったものについて書くというトピックがあったためである。コーパス全体では **dream** を用いた同格節構文は 16 例見つかったがそのうちのいくつかを挙げる：

(33)a. I often have a **dream that** I am in an elevator. (怖い夢、高2)

b. I had bad **dream that** my little brother was dead. (怖い夢、高2)

c. I sometimes see a **dream that** I fall from a very high place. (怖い夢、中2)

d. I often have **dream that** I escape from something. (怖い夢、中3)

(30)から(32)の例は、適切なものであれ、不適切なものであれ、高校生が書いた文であるが、**dream** の場合は(33c,d)のように中学生が書いた文もある。同格節構文が学校現場で取り上げられるのは高校からであり、この構文で典型例として用いられる **fact**, **news**, **belief** などと異なり、**dream** は同格節構文を取る名詞として取り上げられることはほとんどないであろう。これらのことを踏まえると、(33)のような例は、日本語から英語への正の転移 (positive transfer) が働いている例と考えることができそうである。

同格節構文は、当初の予想通り、日本語の「外の関係」に立つ名詞をそのまま同格節構文に持ち込むことにより過剰生成する例が見られた。ただ、その一方で **dream** のケースのように、結果的に正の転移となる場合もあることがわかった。

## 6. まとめ

本論文では、まず日本語の名詞修飾節構造を、英語の関係詞構文および同格節構文と対比し、日英語の違いからどのような誤用が起りやすいかを予測した。その上で英語学習者コーパスのデータに基づき、実際にどのような誤用が起っているかを観察した。

その結果、関係詞構文の場合には、具体性が高い名詞が被修飾名詞になる場合に関係代名詞と関係副詞の混同が起りやすいことがわかり、

同格節構文の場合には、日本語の「外の関係」を持ち込んで過剰一般化をするケースがあることがわかった。ただし、後者では、結果的に正の転移と見なせる場合があることを指摘した。これらの結論は、今後さらに厳密な研究を進めていくことで確認しなければならない性質のものである。

データを観察する中で、文法的な転移はチャックとして頭に入っている表現をそのまま用いるときには起こりにくく、普段使わない語の組み合わせを用いる時に起こりやすくなるのではないかと感じた。また、複文構造を適切に用いることができる能力は、英語の習得段階としては高いほうに入ると思うが、その段階に到達しているかいかの指標は、他のどのような習得要因と関連するのかも興味深い点である。今後、データの幅を広げながらこのような点についてもさらに掘り下げて研究していきたい。

#### 謝辞

本研究は平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号25370698)の補助を一部受けて行われています。

#### 注釈

1. 寺村(1977a)は、英語で「内の関係」に認定されるものには the house standing on the hill, the thing for you to find out のような型の名詞修飾構文を含み、「外の関係」に認定されるものには the year before he died, the smell of something burning, the result of his death などの型の名詞修飾構文も含まれるため、いわゆる関係詞構文や同格構文にわざわざ新奇な名前を与えているものではないとしている。

2. qualification, way など、(12b-8)の分類に属する名詞は、定形節ではなく to 不定詞補部をとって内容を補充する：

i. qualification to become a surgeon in a children's

hospital

ii. the most effective way to eliminate road congestion in city centers

3. 本論文で引用するコーパスデータは原文のまま用いており、つづり、文法、語法などの誤りもそのまま引用してある。

4. この段落で述べていることは、現段階では推測にすぎないが、fluency と accuracy に関する研究などを見ると、この推測を支持するような報告がいろいろとある。このあたりについては、稿を改めて掘り下げるつもりである。

5. これも、今のところ、検証すべき仮説にすぎない。

6. 通例 custom は同格節構文には用いられないとされているが、British National Corpus には以下のように custom が同格節構文に用いられている例が見られる：

i. I should be alone, and the old **custom that** clerks resigned on marriage was told to me in no uncertain way. (BNC, B2E)

ii. ...Yeltsin was nominated despite the **custom that** unsuccessful candidates from a previous ballot did not resubmit their candidatures,... (BNC, HKU)

このような例は正用とは認められておらず、日本の教育現場でも取り上げられていないため、custom が用いられている(28d)のような例は同格節構文の過剰生成と見なしていいだろう。

#### 参考文献

- Ellis, Rod. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

寺村秀夫. 1975. 「連体修飾のシンタクスと意味その  
1」. 『日本語・日本文化』 4, 71-119. 大阪外国語大  
学留学生別科

コーパス

寺村秀夫 1977a. 「連体修飾のシンタクスと意味 その  
2」. 『日本語・日本文化』 5, 29-78. 大阪外国語大  
学研究留学生別科

BNC: British National Corpus

<http://bnc.jkn21.com/>

寺村秀夫 1977b. 「連体修飾のシンタクスと意味 そ  
の3」. 『日本語・日本文化』 6, 1-35. 大阪外国語大  
学研究留学生別科,

JEFL: Japanese EFL Learners Corpus

[http://scn.jkn21.com/~jefl03/cgi-bin/  
login1jf.cgi](http://scn.jkn21.com/~jefl03/cgi-bin/login1jf.cgi)